はじめに

多くの作品の中から本書を選んでいただき誠にありがとうございます。

本作は、作者自身のフェティシズムと強い願望をこれでもかと詰め込んだ一冊となっております。コンセプトはズバリ、「男らしく身体能力も圧倒的な彼氏が、可愛らしくも小悪魔な彼女の色仕掛けとテクニックに甘く屈服させられてしまう」シチュエーションです。

「可愛い女の子と組み手や格闘をして勝ちたい……けれど、それ以上に色仕掛けに抗えず負けてしまいたい」「油断や隙を突かれて形勢逆転され、甘い地獄に引きずり込まれたい」――そんな性癖をお持ちの方には、心から楽しんでいただける内容を目指しました。

日常ではなかなか味わえないシチュエーションですが、妄想の限りを尽くして執筆いたしましたので、どうぞリラックスしてお楽しみください。

※なお、末尾に読者様へのお願いを記載しております。もしお気に召していただけましたら、評価（★）をいただけますと大変励みになります！

目次

はじめに

登場人物紹介

第１章：【プロレス】完璧なホールドを溶かす甘い罠

第２章：【リベンジ】逃げ場なき『パフパフ』の監獄

第３章：【レストラン】テーブルの下の秘密と足指の罠

第４章：【トイレ】寸止めのおねだりと完全なる陥落

第５章：【主従】『いかせてください』甘美な屈服の夜

第６章：【相撲】剛力を崩す柔肌と、廻しの束縛

おわりに

登場人物紹介

■ 大翔（ひろと）／２５歳・男性

容姿・身体的特徴：身長１８２㎝。モデルのようなスタイルに加え、日課のトレーニングで鍛え上げられたしなやかな筋肉を持つ。背筋や前腕の浮き出る血管など男らしさに溢れるが、表情には優しさと

奥手さが残る。

性格・気質：会社では爽やかで仕事もできる頼れる存在。しかし恋愛に関しては非常に純情で、女性からのダイレクトな色仕掛けや肌の密着にはめっぽう弱い。

趣味・特技：ジムでのワークアウト、プロレス観戦。彼女である莉乃を守れる強い男でありたいと思っているが、いつの間にか彼女の「小悪魔的な色仕掛け」の前に完敗を重ねるようになってしまう。

■ 莉乃（りの）／２５歳・女性

容姿・身体的特徴：身長１５２㎝。大翔とは３０㎝の身長差がある小柄で愛くるしい童顔。しかしその体躯に反して、胸元はＦカップという極上の肉感とメリハリを誇る。

性格・気質：職場ではしっかり者の「頼れるお姉さん」。だが本質は内弁慶で、大翔にだけは見せる強い独占欲と小悪魔的なＳっ気を持

っている。大翔の弱点を完全に把握しており、彼を甘く甘く屈服させることに至上の悦びを感じている。

二人の関係性：周囲からは「爽やかな美男美女カップル」として見られているが、プライベートの二人の空間では完全に莉乃が主導権を握る女王様。力では勝てない莉乃が「女の武器」をフル活用し、大翔をメロメロにして跪かせる甘美な関係を築いている。

第1章：【プロレス】完璧なホールドを溶かす甘い罠

【プロレスごっこのルール】

・お互いに楽しくスキンシップを行うこと。

・痛みを伴う暴力行為は禁止（痛くなければ拘束等は可）。

・3カウント取られるか、ギブアップを宣言した時点で敗北。

・負けた方には「罰ゲーム」が課される。

（暗黙のルール：勝った方が次のデートの主導権を握れる）

1　大翔、予想通りの圧勝か！？

日曜日の午後。柔らかな陽光が差し込むリビングには厚手のラグが敷き詰められ、二人だけの秘密の格闘場へと変貌していた。大翔と莉乃にとって、この「プロレスごっこ」は単なるスキンシップを超えた、互いの主導権を懸けた真剣勝負の儀式となっていた。

大翔は身長182センチの引き締まった肉体の持ち主。一方の莉乃は152センチの小柄な体躯。しかし、その華奢な肩書きとは裏腹に、豊かなFカップのバストと柔らかな肉体を持つ、男性にとっては毒薬

のような魅力の塊だった。

莉乃の色気に惑わされる前に、大翔は先手必勝で動いた。彼は莉乃の背後に回り込み、その細い腰をガッチリと腕で囲い込む。バックテイクー背後からの完全な制圧だ。

大翔は彼女の背中に軽く体重を乗せ、マットに押し伏せる。莉乃のうなじから漂うシャンプーの甘い香りが鼻腔をくすぐる。自分の腕の中で抗う彼女の柔らかな感触を楽しみながら、大翔は勝利を確信していた。

体格差、筋力差、そして格闘技への理解度。どれをとっても大翔が圧倒しているはずだった。

「ひろと……苦しいよ……っ」

莉乃がか細い声で呟く。その守ってあげたくなるような声を聞くたびに、大翔の胸の奥で庇護欲と征服欲が複雑に火花を散らす。彼は笑

みを浮かべ、さらにホールドを強めた。

「参ったするなら今のうちだぞ。俺の腕から逃げるのはプロのレスラーでも無理なんだからな」

大翔は、このまま彼女が可愛らしく白旗を揚げるのを待っていた。だが、彼はまだ知らなかった。莉乃にとって、この「劣勢」こそが大翔を奈落の底へ突き落とすための最高のステージであることを。

2　莉乃、禁断の「誘惑攻撃」：優しいフェザータッチと甘いキス

静寂が支配する数秒間。莉乃は抵抗をピタリとやめ、深い溜息をつくように全身の力をふっと抜いた。大翔が訝しげに眉をひそめたその瞬間、莉乃は首だけを後ろに巡らせた。

湿り気を帯びた潤んだ瞳。少しだけ開いた桜色の唇。そこから漏れるのは、格闘の最中とは思えないほど艶めかしく、甘い吐息だった。

「ねえ、ひろと……。そんなに強く抱きしめられたら……私、変な気分になっちゃう……っ」

その言葉は大翔の耳元で熱を帯びて弾けた。彼の心臓が激しく跳ねる。莉乃は大翔の動揺を見逃さず、自分の体を彼の腕の中でゆっくりとくねらせた。わざと背中を大翔の胸板に押し付け、密着度を極限まで高めていく。

「っ……！　お前、何言って……」

大翔の思考が乱れる。彼の最大の弱点は、莉乃の放つ底なしの色香に壊滅的なまでに弱いことだった。莉乃はそれを息をするように自然に利用してくる。

莉乃の細い指先が、大翔の逞しい腕をなぞるように滑り落ちた。それはまるでピアノの鍵盤を叩くような軽やかさで、しかし確かな熱を持って、大翔の股間へと辿り着く。

「……あ」

大翔の喉が鳴った。莉乃の指先は、布地越しに彼の最も敏感な場所に触れた。しかし、それは決して力強い愛撫ではない。指の腹で、なぞるか、なぞらないかーーまるで羽毛で撫でられているような、極限までソフトな「フェザータッチ」だった。

「っ、う……莉乃、やめろ……っ」

「やめないよ。ひろと、ここ……すごく熱くなってる。プロレスしてるだけなのに、どうして？」

莉乃は囁きながら、もう片方の手で大翔の頬を包み込み、引き寄せた。そして拒む間も与えず、彼の唇を自分の唇で塞いだ。

深い、深いキス。莉乃の舌が大翔の口内を蹂躙し、彼の思考回路を一つずつ焼き切っていく。股間を撫で上げる微細な指の動きと、酸素を奪い去るようなキスの波濤。大翔の脳内は快感の飽和状態に達し、あれほど強固だったホールドの腕は脱力して、今や力なく莉乃にされ

るがままとなっていた。

3　形勢逆転！ヒップアタックと愛撫でメロメロノックアウト！

「……ぷはっ！」

熱烈なキスから解放された瞬間、大翔は酸欠の魚のように口を開けて空気を求めた。しかし、そのわずかな回復の間さえ莉乃は許さなかった。彼女は驚くべき瞬発力で大翔の腕をすり抜けると、逆に彼の巨体をマットの上へと仰向けに転がしたのだ。

「わっ……！？」

視界が激しく反転し、天井が目に映る。体勢を立て直そうと大翔が身をよじった次の瞬間、彼の視界を完全に遮ったのは、莉乃の豊満で柔らかな曲線ーーその圧倒的なボリュームを誇るヒップだった。

「仕上げだよ、ひろとくん！　私の愛を全身で受け止めて？」

莉乃の声が響くと同時に、彼女はダイナミックに跳躍した。狙いは腹部ではない。抵抗を試みる大翔の顔面そのものだった。

ドサッ！

「む、ぐうっ……！？」

大翔の顔面を、桃のような弾力と甘い香りが直撃した。強烈なフェイス・ヒップアタック。莉乃の全体重が顔面に乗っかり、大翔は息を呑む。鼻腔を埋め尽くすのは彼女の体温と、女の香りが混じり合った濃厚な熱気だ。視界は真っ暗になり、柔らかな肉の圧力だけが脳を支配する。